

住居の庭利用法と評価に関する一考察

岩重博文

(2001年9月28日受理)

A consideration on using plan and its evaluation of house garden

Hirofumi Iwashige

In general, we have some free space out of the house. It makes a kind of space isolation from neighbours, and also an expanded space from living room. There are three kinds of space; an approach from the gate to the entrance, a main garden in front of the living room, and a back yard (or a service yard) near kitchen. In this paper, we discuss about two directions for house entrance. One is the entrance from north street (north entrance), and the other is the entrance from south street (south entrance).

In the case of north entrance, there are so many things in the main south garden more than that of south entrance; for example, shed, clothes-drying place, dust tool, bottle, can, trash box, wastebasket, dog house, table, chair, potted plant, flower bed, kitchen garden. In the case of south entrance, there are many similar things in the back yard more than that of north entrance, without dog house, table, chair, and kitchen garden.

There are some difference of place where we stand chatting together between two cases of north entrance and south entrance. In the case of south entrance, most of the chat while standing is made on the approach. In the case of north entrance, it is made not only on the approach but also in the main garden and in the back yard.

There are some difference about satisfaction factor of their own garden, and about importance factor of their ideal garden concerning the resident year. The importance factor is larger in the group who lives less than six years, than that of more than six years group. The big difference between the satisfaction factor of their own garden and the importance factor of their ideal garden becomes gradually smaller if they live their house so long.

Key Words: Approach, Main garden, South entrance, North entrance

キーワード：前庭，主庭，南入り，北入り

1. はじめに

住宅では、建物を取り囲む形である程度の広さの庭を確保することが一般的である。この住宅の庭は、外部に対する緩衝的空間、および居間などにつながる屋外生活の場としての役割がある。庭は、門から玄関までのアプローチとしての前庭、居間や食事室などに面した主庭、および台所やユティリティーとつながるサービスヤード(裏庭)などから構成されている。これらの庭においては前面道路位置による侵入方向の差異、庭の適切な区分、庭の利用の仕方、近隣との関係などが住宅における住み良さを決定する要因となるであ

う。今日では「庭付き一戸建て」が日本における一般の住宅であり、近年のガーデニング・ブーム、および集合住宅における庭のためのルーフ・バルコニー付きマンションの人気など庭に対する関心も高まっている。本報告では、居住者の意見が比較的反映されやすい一戸建て住宅の庭に着目し、庭利用の実態、および居住者による評価などについて調査する。これらより敷地と公道との接し方、主庭の位置、庭の利用状況、居住者による評価などを把握する。これらの調査により一戸建て住宅の庭利用の特徴・問題点を抽出し、今後の住生活を豊かなものとするための庭のあり方についての指針を得ようとするものである。

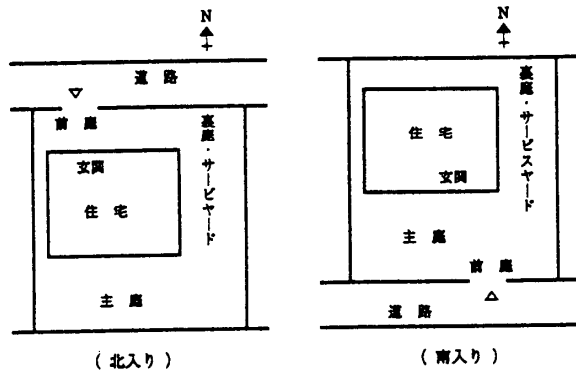


図1 道路と入口等の配置計画

2. 調査の概要

2.1 調査の目的

住宅の敷地を購入する時点から、敷地内の土地利用法をすでに考慮しているであろうか。もちろん必要なことであるが、なかなか配慮されないのが実状である。このことは敷地と道路との接し方、それともなう入口（玄関）の方位、主要な庭の配置にも影響をおよぼすことになる。これらの調査により、居住者の庭に対する評価も判明すると思われる。

2.2 調査内容および調査方法

調査は東広島市内の住宅団地において、一戸建て住宅を対象にして行った。住宅の配置計画は公道との接し方について各種の場合が想定できる。例えば、東側道路、西側道路、南側道路、北側道路および角地などである。ここでは、最も多いと思われる北側道路と南側道路の2分類に焦点をあてて調査検討する（図1参照）。アンケート用紙を各戸へ直接配布し、後日回収した。北側道路（玄関は北入り）および南側道路（玄関は南入り）の各場合それぞれ50戸計100戸の有効回答数を得た。

調査の内容は、現在の庭の利用状況、庭での生活行為に関する現在の庭に対する満足度評価、庭での生活行為に関する理想とする庭における重要度評価などが主な項目である。

3. 結果と考察

3.1 回答者の属性に関する考察

調査対象とした家庭（100戸）の世帯主の年齢構成を示すと、20歳代1%、30歳代27%、40歳代54%、50歳代16%、60歳代2%であり、30歳代と40歳代で80%以

上を占めており新しい住宅団地であるためか比較的若い世帯主が多かった。家族人数については家族4人が52%、家族5人が21%で、全体平均としては4.1人で標準的家族が主流であった。

住宅の敷地面積については、70~79坪が全体の51%で最も多く、80~89坪が19%、60~69坪が16%であり、全体の平均は75.8坪と比較的広い敷地面積である。また、建築面積については30~39坪が75%、40~49坪が14%であり、全体平均は35.6坪と中程度の建築面積である。

住宅の所有形態は98%が持ち家であった。住宅の築後年数は3年から9年の間に全体の90%が分散しており、対象者の平均築後年数は約6.2年である。また、対象者の居住年数も3年から9年の間に全体の90%が分散しており、平均的居住年数は約5.8年である。これらより、この団地で毎年分譲される敷地に住宅を建築後、数ヶ月経て各住宅に入居したことが推察される。

3.2 庭の利用状況とその考察

それぞれの庭、前庭・主庭・サービスヤード（裏庭）に対し、庭に置かれている物品・庭で行われる行為などに関する項目について調査した。これらの各項目に対し北入りと南入りについて比較検討する。

3.2.1 庭に置かれる物品についての考察

前庭については、自転車、北入りにおいて南入りより12%多く見られた。その他の項目については大きな差は認められなかった。

主庭には、「物置・物干し台・掃除道具・ビン・カン・ゴミ箱・紙くずなど」室内からの流失をあらわす物品について、北入りの場合南入りの2倍以上の物品が置かれている。「テーブル・椅子・鉢植え・花だん・菜園など」庭独自の利用をあらわす物品も、北入りのほうに比較的多く見られる。特に北入りの住宅では94%の家庭に花だんが見られた（図2参照）。

サービスヤード（裏庭）においては、室内からの流失をあらわす物品は、南入りの場合にやや多く見られる。特に南入りの場合、物置をサービスヤードに置く家庭が80%に上っている（図3参照）。また、北入りの場合「ビン・カン・ゴミ箱・紙くずは物置の中に置く」回答が見られた。

3.2.2 庭で行われる行為についての考察

前庭においては、「立ち話をする」行為が北入り・南入りとも一般的に多く、特に南入りでは90%に達している。また、南入りの場合「日光浴をする」が12%見られた。その他の項目については大きな差は認められない。

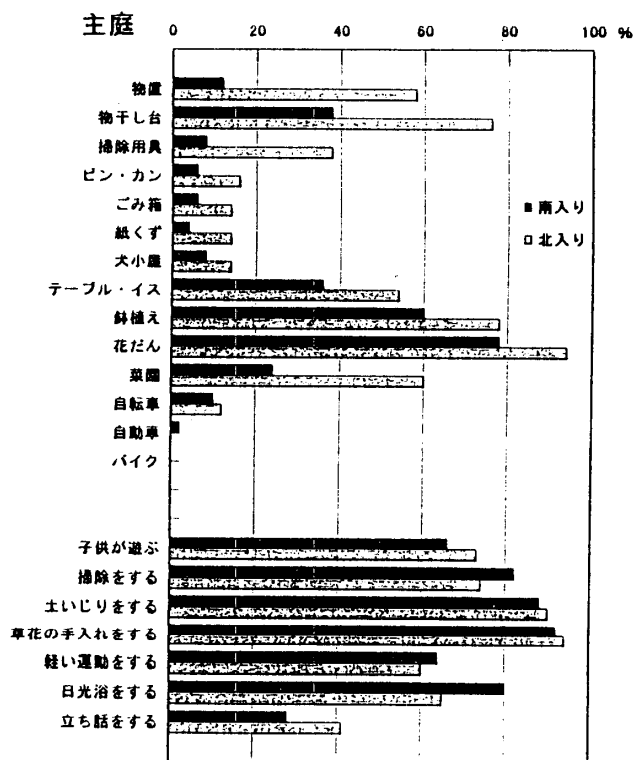


図2 主庭の利用状況

主庭においては、「掃除をする・日光浴をする」が北入りより南入りで比較的高い値を示している。また、前庭では「立ち話をする」が南入りで多く認められたが、主庭では「立ち話をする」は北入りのほうに多く認められている（図2参照）。

サービスヤード（裏庭）においては、「立ち話をする」項目に関し、北入りは南入りの約2倍におよんでいる（図3参照）。

庭以外の戶外生活を受け入れる行為としての「立ち話をする」に関しては南入りと北入りとで傾向が少し異なっている。南入りでは、前庭での値が極めて高いが、北入りでは前庭につき主庭とサービスヤードでの値も比較的高くなっている。この「立ち話をする」は生活の中での自然な行為であり、人の移動の活発な場所で行われる。すなわち、北入りの場合、前庭からサービスヤード、主庭へと人が頻繁に移動して行為が行われている結果とかがえる。他方、南入りの場合はその行為は前庭で行われることが主であり、他の庭へ移動して行うことは少ないと考えられる（図4参照）。

3.2.3 庭の利用における物品と行為についての考察

アンケート調査における質問の物品に関する項目、および行為に関する項目を以下のように5分類することとする。

物品A：室内からの流出をあらわす物品

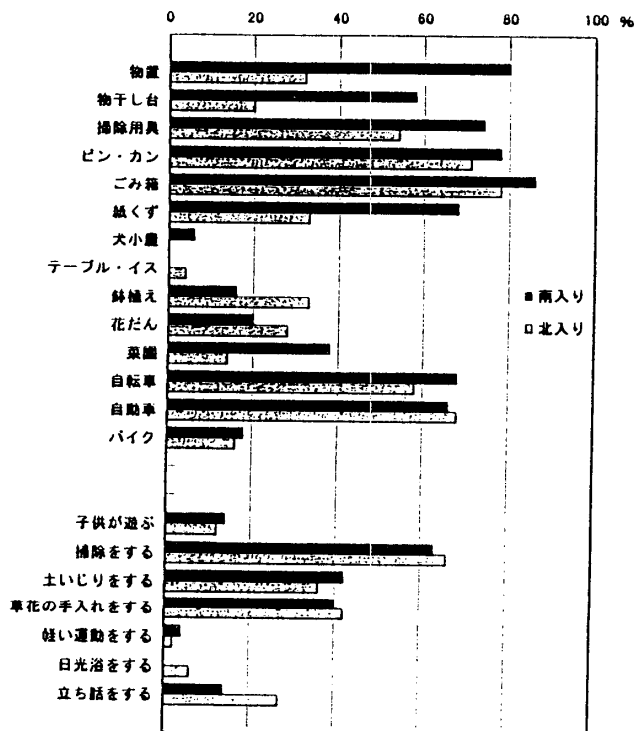


図3 サービスヤードの利用状況

「物置」「物干し台」「掃除道具」「ピン・カン」「ごみ箱」「紙くず」などである。

物品B：庭独自の利用をあらわす物品

「犬小屋」「テーブル・イス」「鉢植え」「花だん」「菜園」などである。

物品C：庭以外の戶外生活を受け入れる物品

「自転車」「自動車」「バイク」などである。

行為B：庭独自の利用をあらわす行為

「子供が遊ぶ」「掃除をする」「土いじりをする」「草花の手入れをする」「軽い運動を

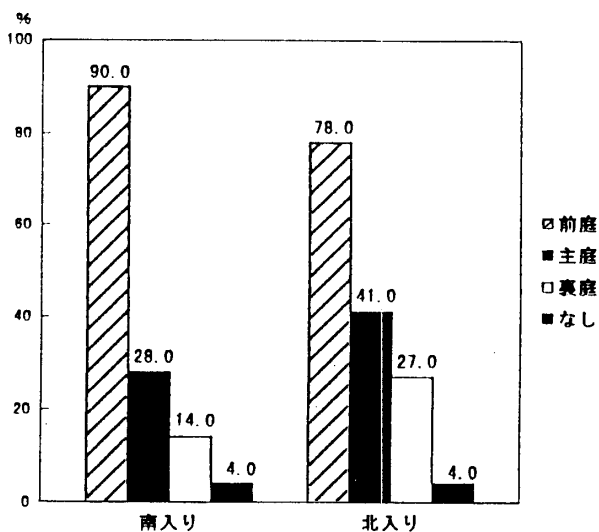


図4 立ち話が行われる場所等

する」「日光浴をする」などである。
行為C：庭以外の戸外生活を受け入れる行為
「立ち話をする」である。

室内からの流出をあらわす物品Aは、玄関に近い前庭に置かれることはほとんどない。南入りでは、ほとんどの場合サービスヤードに置かれている。北入りでは、サービスヤードと主庭に分散して置かれている。北入りの場合、主庭は公道から直接見えることはなく、室内からの流出物品Aは外部から見えにくい場所に置かれる傾向にあると考えられる。

庭独自の利用をあらわす物品Bは、南入り・北入りともに主庭に最も多く置かれている。物品Bの置かれる場所の相違点は、北入りの場合の主庭と前庭の差は約40%で主庭が多い。一方、南入りの場合の主庭と前庭の差が約20%でありその差はやや少なく、北入りに比較し主庭と前庭の利用の方法が近似していることがうかがえる。

庭以外の戸外生活を受け入れる物品Cは、南入り・北入りともにサービスヤードに最も多く置かれている。本調査では、自動車の車庫はサービスヤードと想定していたが、実際の回答では前庭と回答したものがかなり多く、調査の主旨に従うと車庫はサービスヤードの欄へ移す検討が必要である。

庭独自の利用をあらわす行為Bは、南入り・北入りともに同様の傾向を示している。その場所は主庭が最も多く、前庭とサービスヤードでその半分くらい認められる。「掃除をする」「土いじりをする」「草花の手入れをする」などは複数回答であるが、南入り・北入りとも庭の手入れを庭全体に行っているようすがうかがえる。また、前庭とサービスヤードに関しては前述する3項目が行為Bのほとんどを占めている。すなわち行為Bのうち、庭を使用して行う生活行為はほとんどの場合、主庭で行われており、前庭やサービスヤードでの行為は庭の維持管理のための行為といえる。

3.2.4 庭の分類の視点からの考察

前庭は、玄関へのアプローチとして重要である。鉢植えや花だんで空間に潤いを与えて、来客を気持ち良く迎える意識が感じられ、室内からの流出物などはほとんど置かれていない。前庭における行為C「立ち話をする」は南入りと北入りのいずれでも認められるが、南入りでより多く認められる。

主庭は、家族が団らんを楽しむ居間や食堂に面することが一般的で家族にとって重

要な庭である。「庭独自の利用をあらわす行為」が高い割合であらわれており、居住者は意味を持った空間として主庭を利用しているといえる。南入りより北入りの場合に、半数以上の家庭で主庭に「物置・物干し台」などの物品を置く場合が多い。また、「鉢植え・花だん」など庭独自の利用をあらわす要素も認められる。これらは、北入りの場合の主庭が公道から直接見えない位置にあるためと考えられる。逆に、南入りの主庭は公道から見えることが多く、外部からの視線を意識したものになっている(図5参照)。

サービスヤード(裏庭)は、台所やユティリティーとつながる実用的空間である。本報告では、住宅の南北をつなぐ通路や車庫部分もサービスヤードと考えている。物品Aと行為Cにおいて、南入り・北入りの差が認められる。南入りでは「室内からの流出物」が北入りより多くサービスヤードに置かれている。これは外部からの視線を意識して主庭に置かないためであろう。逆に北入りでは、室内からの流失物を主庭に置くことも多く、サービスヤードの物品は多少少ない。以上より、北入りにおけるサービスヤードは、物品を置くだけでなく、南側にある主庭へのアプローチの役割も果たしている。一方、南入りではサービスヤードを主として物品置き場として利用しており、閉鎖的空間となっている。また物品Bに関しては、「鉢植え・花だん」が北入りのほうで多く認められ、逆に南入りでは「菜園」が見られる。これらより、北入りは外部への意識を感じる空間であり、南入りは実用性を重視した空間となっている。

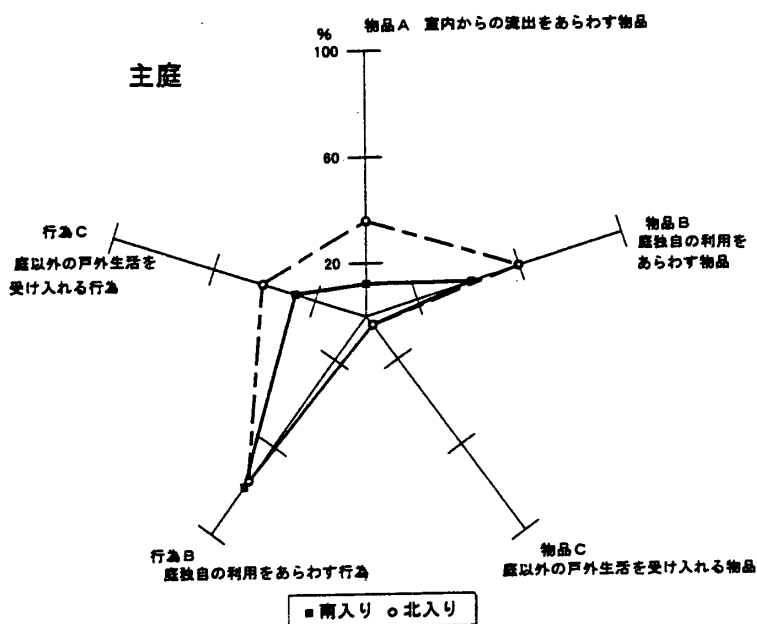


図5 主庭の分類による利用状況

3. 3 庭に対する評価の考察

庭に関する調査内容の各項目について5段階で評価を行った。調査は、現在住んでいる住宅の庭に関する各項目についての満足度、および居住者が理想とする庭における各項目の重要度である。各項目それぞれについても検討しているが、ここで詳細に示すことは概要を見るうえでは煩雑になるため、以下に示すA～Hまでの8つの項目を分類し整理する。

- A：緑の存在
- B：地面（土）の存在
- C：自然環境要素の認知・利用
- D：野生小動物との遭遇
- E：使途の自由
- F：生活空間の変化
- G：空間的余裕の存在
- H：公私空間の境界形成

3.3.1 現在の庭に対する満足度と理想とする庭の重要度の考察

1) 南入り敷地に対する考察

A「緑の存在」、E「使途の自由」、F「生活空間の変化」に関する項目において、満足度より重要度が比較的高くなっている。特に重要度が高い項目は(A)「室内にいながら、木や草花を眺められる」「好きな草花を育て、成長を楽しむ」、(E)「自分の趣味や好みにあった場所が作れる」、(F)「一家団らの場として使える」「洗濯物を気持ち良く干せる」などである。これらより現在の庭よりも緑が多く、自由でくつろげ、かつ実用的な庭を求めていることが推察できる。他方、満足度より重要度がやや低いものは、D「野生小動物との遭遇」、H「公私空間の境界形成」に関する項目である。特に(H)「隣近所の様子が庭を介してわかる」の項目はどちらの値も低いが、そのうち重要度がより低い。「隣近所の様子が庭を介してわかる」については、実際の生活において意識している人は比較的少なく、理想の庭においてもそれほど重要視していないといえる。この項目は、視線によるプライバシーの侵害にもつながり、外部へあまり干渉しないようにする気持ちのあらわれともいえる。図6以降に示す軸目盛りには5段階評価における項目分類ごとの平均値をプロットしている(図6参照)。

2) 北入り敷地に対する考察

南入りと同じく北入りにおいても、A「緑

の存在」、E「使途の自由」、F「生活空間の変化」に関する項目で、満足度より重要度が比較的高くなっている。実際の庭よりも緑が多く、自由でくつろげ、かつ実用的な庭を重要と考えている。また、(F)「室内と一体となった使い方ができる」、(H)「我が家への来客や侵入者が一目瞭然できる」などについては現状に対して不満を持っているが、しかし、室内と庭とのつながりがを求める点を重要と考える人が多い。B「地面(土)の存在」に関する項目における「花だんや、家庭菜園を作ることができる」「非常時にすぐに外に出られ、避難できる」について、「重要でない、あまり重要でない」と回答した人はほとんどなく、むしろ重要視されている項目であるといえる(図7参照)。

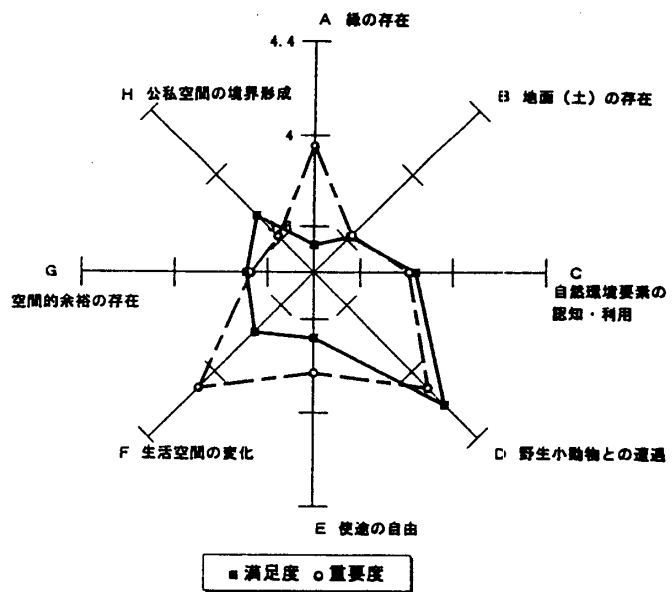


図6 南入りにおける満足度と重要度

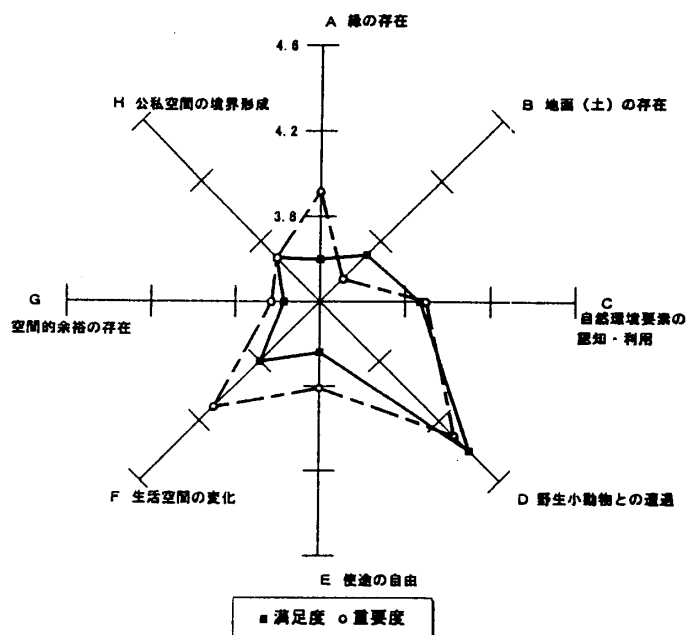


図7 北入りにおける満足度と重要度

3.3.2 居住年数と庭に対する評価の考察

ここでは居住年数の違いによる庭に対する評価の相異について考察する。前述したように、調査対象者の平均居住年数は5.8年であった。このため居住年数6年未満と6年以上に2分類し、「現在の庭に対する満足度」と「理想とする庭に対する重要度」について検討する。図8は居住年数6年未満の場合の満足度と重要度を示したものである。A「緑の存在」、E「使途の自由」、F「生活空間の変化」などに関する項目において、現在の庭の満足度より理想とする庭の重要度が高いことが認められる。その他の項目については大きな差は見られない。居住年数6年未満の場合、A「緑の存在」、B「地面（土）の存在」の満足度がやや低いことがうかがえる。これらより、居住年数6年未満では、現状に比べかなり高い理想を持っていることがうかがえる。また、居住年数6年以上では、満足度と重要度の間に大きな差が認められなくなり現状に満足する項目が増加していると推察される。

1) 居住年数と満足度に関する考察

図9に、居住年数により分類した「現在の庭に対する満足度」を示している。ほぼ全項目について6年未満の評価の値は、6年以上の評価の値に比べてわずかに大きい。これは、長く居住している間に、徐々に不満を感じる点が発生しているものと推察される。

2) 居住年数と重要度に関する考察

図10に、居住年数と「理想とする庭に対する重要度」との関係を示している。ほぼ全項目にわたり居住年数6年未満の評価の値は、6年以上の値よりかなり大きい値となっている。これは、庭に求められる要素は同じであっても、居住年数が短い方が庭に対する意識は高い。すなわち、居住年数が短い方が現実と理想との差は大きい、居住年数が長くなるにつれ現実と理想との差が徐々に小さくなっていくものと考えられる。

4. 今後の課題と展望

以上から一戸建て住宅における庭の利用法と、居住者の庭に対する評価についてまとめる。

住宅の敷地が、公道の北側（南入り）

または公道の南側（北入り）いずれに面しているかにより、住居内の庭の利用法がかなり異なる。公道の北側に面した場合、公道側に前庭と主庭が隣接しており、住宅の北・東・西側などがサービスヤードとなり物置き場的に閉鎖的になりやすい。一方、北入りの場合サービスヤードは公道側の前庭と南側の主庭とをつなぐ通路の役目を兼ねており、頻繁に活用されて閉鎖的にはなりにくい。これらが庭の利用状況の相異に影響をおよぼしている。「立ち話」など戸外生活を受け入れる行為においても南入りと北入りの差が認められる。南入りの場合は主として前庭で「立ち話」が行われるが、

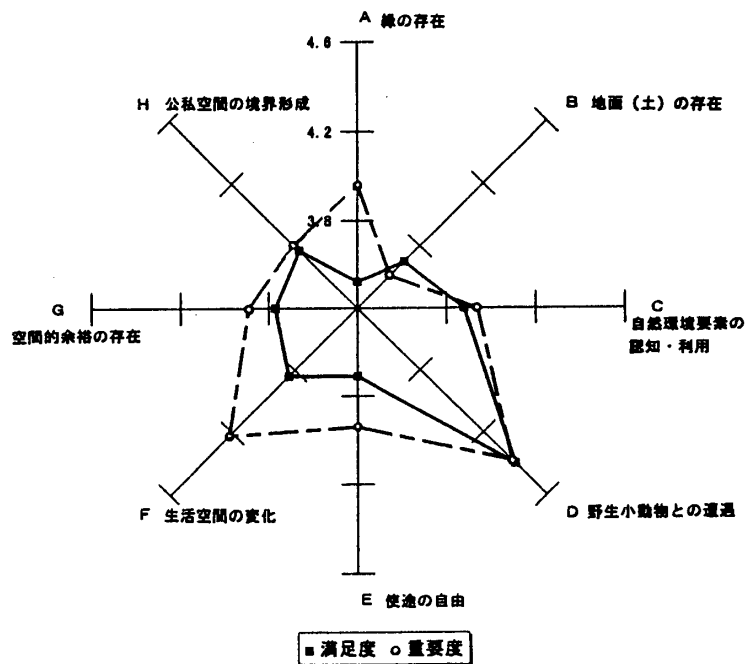


図8 居住年数6年未満の満足度と重要度

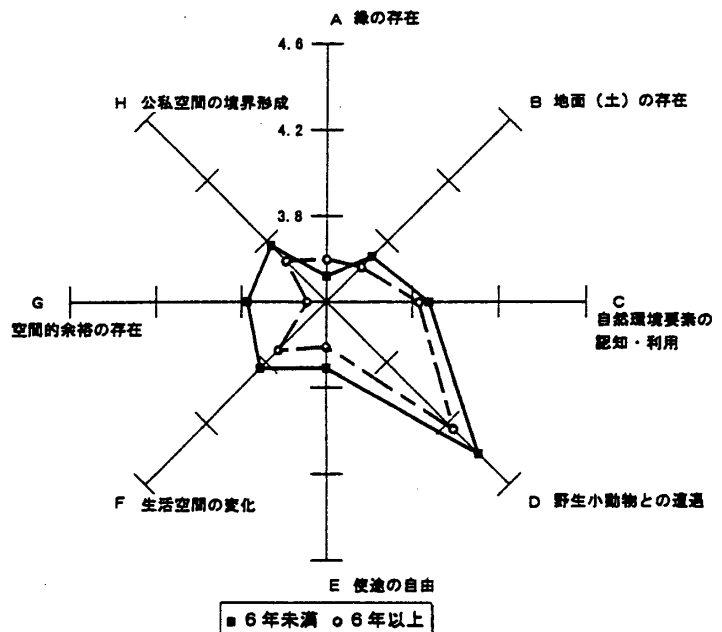


図9 居住年数に対する満足度

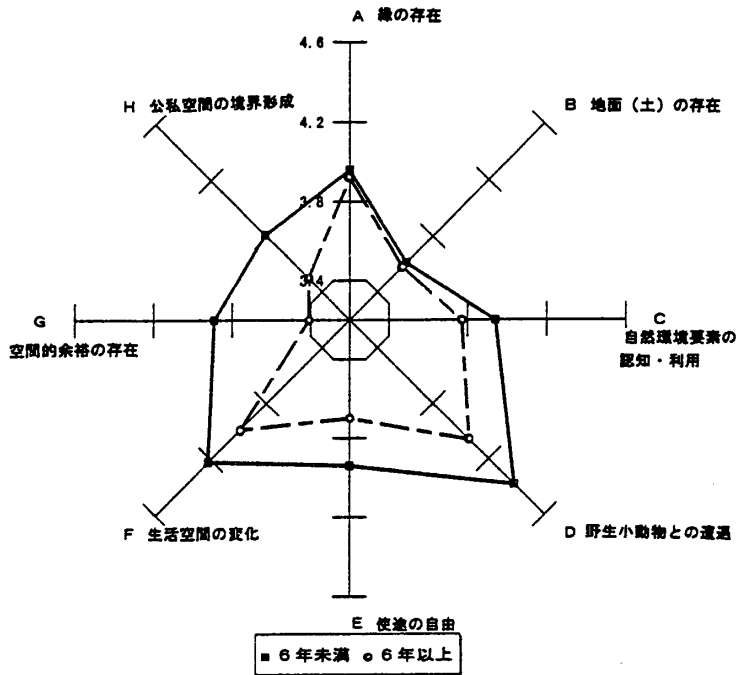


図10 居住年数に対する重要度

北入りでは前庭のほか、サービスヤードや主庭でも行われる。南入りと北入りいずれにおいても「緑の存在」「用途の自由」「生活空間の変化」などに関する項目において満足度より重要度が高く、草花を育て、自由に空間を演出して楽しむことは庭においてかなり重要と考えられている。これらより、現在の庭よりも緑がさらに多く、自由にくつろげ、かつ実用的な庭が求められているといえる。

実際の生活においては、庭を介した隣近所の様子を意識している人は少ないと思われる。しかし、外部に対する緩衝空間としての庭の機能において、来客や侵入者は一目瞭然であることが望ましいが、視線によるプライバシーの侵害を避けることなど両要素のバランスがうまく保てる必要がある。

居住年数を6年未満と6年以上に分類し、現在の庭に対する満足度や理想とする庭に対する重要度を考察した。「緑の存在」「用途の自由」「生活空間の変化」に関する項目については居住年数にかかわらず満足度より重要度が高いが、その他の項目については6年未満の場合に満足度より重要度が高い。これは、居住年数が長くなると現状に満足していくものと推察される。すなわち居住年数が短いほうが現実と理想との差は大きく、居住年数が長くなると現実と理想との差は徐々に小さくなっている。

今回の調査では対象者の年齢を限定していないが、次回は年齢別の調査を試み、その満足度や重要度の相異点を検討する必要がある。

生活は住居内だけで行われるものではなく、近隣とのかかわり合いも重要である。今日、都市の拡大とともに郊外の住宅地には新住民が大量に流入するため住民間の共同性の喪失を招くことがあり、近隣同士のつながりも薄れがちである。このような郊外の住宅地は今後も増加すると思われるため、その中の住宅の庭には、その住宅の機能性だけでなく、近隣との交流や街路の景観との調和など外部にも目を向けた質の向上が一層求められるであろう。

この調査について終始ご助力いただいた元広島大学学生川上佳子嬢に感謝いたします。

参考文献

- 1) 藤本, 山下, 杉山, 大間, 『新建築学大系28 住宅の設計』, 彰国社, 1988.
- 2) 永野和彦, 畑聡一, 「低層集合住宅に関する研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集』, p.1081, 1979.
- 3) 永野和彦, 畑聡一, 「生活領域の拡大に伴う専用庭利用の問題点」『日本建築学会大会学術講演梗概集』, p.781, 1980.
- 4) 広島県住宅供給公社編, 『東広島ニュータウンの概要』, 1997.
- 5) 地域振興整備公団編, 『建築協定のしおり』, 1994.
- 6) 水野達夫, 藍澤宏, 「中層集合住宅における住人の庭意識に関する研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集』, p.59, 1987.
- 7) 小澤紀美子編, 『豊かな住生活を考える -住居学』, 彰国社, 1995.
- 8) 遠藤安弘, 大海一雄, 『タウンハウスの実践と展開』, 鹿島出版会, 1983.
- 9) 清家清, 本間博文, 『住居 I 住生活論』, 日本放送出版協会, 1985.